

# きべりはむし

## 第13巻 第1号

### 目 次

クロハナムグリについて	高橋 寿郎	1
武庫川のヒメジュウジナガカメムシ(続報 2)	新家 勝	10
宍粟郡波賀町のムラサキツバメの記録	勝屋 潤	13
宝塚市清荒神のチョウ(追録 4)	加藤 信一郎	16
新神戸駅のミスジビロードスズメ	田中 稔	17
神戸市山田町の蛾(続報 III)	松本 健嗣	18
兵庫県産コメツキムシの記録	有本 久之	20
兵庫県下でのイトヒゲニセマキムシの採集例	高橋 寿郎	22
兵庫県産二種のハムシの記録	高橋 寿郎	22
イワワキオチバゾウムシ(?)神戸市内に産す	高橋 寿郎	23
県関係文献紹介		25
会 員 異 動		27

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1985年5月

## クロハナムグリについて\*

高橋 寿郎

クロハナムグリ *Glycyphana fulvitemma* Motschulsky は体長 11~14mm. 黒色で背面は光沢にふいが腹面では強い。上翅の中央に淡黄色の帯状紋があり、丁度紋付を着た容姿端麗と言った表現がピッタリするようなコガネムシである。コデマリとかガマズミの様な白い花に飛来している姿はほんとうにビックリする程美しい。

このコガネムシは日本では各地に広く分布していて一度に多くを見ることは割合少ないようであるが、まず日本産コガネムシの中の普通種の 1 つであることは間違いなさそうである。最近出版された原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)の中で八重山諸島産のものは別亜種に区別されるように発表してあったが、少なくとも斑紋だけを見たら神戸市内でも採集出来ているものである。

そこでこの種の斑紋とか分布に就いてを中心に手許にある標本、資料とかで雑文を書いて見た。

本種が初めて記載されたのは Motschulsky によって 1860 年 Schrenck のアムール川流域での極東探検調査報告書の中においてのようである (in Schrenck's Reise Amurlander, p.135, 1860)。この原記載を直接見ていないので原産地をどの様にされているのか良くわからない。所謂アムール川(黒龍江)については筆者も忘れ得ぬ思い出がある。1945年(昭和20年)満州国四平街(現中国吉林省)にて終戦をむかえ、武装解除をされシベリア(実際にはソ連カザク共和国)での抑留強制労働が待っていると知らずアムール川畔、ブラゴベシチェンスクの対岸愛輝(アイホイ・黒河)の川原で天幕をはって2泊程したこと。船に乗りアムール川を渡ったが、ブラゴベシチェンスクの街はいやに道路の広い煉瓦造りの建物が並んで静かだったことと、丁度10月始めであったが粉雪が舞って大変寒かった思い出が今でも強烈に残っている。このアムール川流域の何処で採集されたのであろうか所謂の広大なシベリアの地の中の何処かであろうと思う(1937年に出版された第一次満蒙学術調査研究団報告, V11-II, part. VII, Artic. 55の中には本種は出てこない)。

1875年 C. O. Waterhouse は有名な G. Lewis が主として南部日本で採集して帰国したものに基いて "On the Lamellicorn Coleoptera of Japan" と題する論文を発表した (Trans. Ent. Soc. London Part. 1: 71~116, pl. 3)。この中で p.114 にこの種が出てくる。本種が日本から記録されたのは恐らくこの論文によるものが始めてではないかと考える。たゞ

\* 兵庫県甲虫相資料. 153

きべりはむし Vol.13, No.1, p.1-9, 1985

残念なことに単に種名と Hab. Mongolia ; Japan となっているだけで何一つ解説が無い。それとこの種の前に Glycyphana Sieboldi, Snellen v. Voll. Hab. Japan と独立種としてしかも解説無し種の種名が出ている。

1879年 G. Lewis は London で " Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago " を発行した。この p. 14 に № 1015, Sieboldi, № 1016 に本種が出ている。

1886年 H. J. Kolbe は " Beitrage zur Kenntniss der Coleopteren—Fauna Koreas " なる論文を発表した (Arch. f. Naturg. 52 : 139—240)。この中で p. 196 の所に本種が収録されていて産地として Amurgebiet (アムール川流域), Daurien, Mongolei, Korea and Japan とのみあってこゝでもこの種に就いての解説の様なもの全く無い。

1887年には Schönfeldt, H. V. の " Catalog der Coleopteren von Japan mit Angabe der bezuglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte " が発表された (Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde 40 : 31—224)。この中に p. 110 に本種並びに Sieboldi で独立種として取扱われ共に産地は Japan とのみになっている (この論文では産地名の記されているものも多くある。従来の文献を集大成した様なものではあるが一)。

同じ年 (1887) G. Lewis は " On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities " なる論文を発表した (Ann. Mag. Nat. Hist., XIX (5) : 196—202)。その中で p. 199 に本種を記録し Sieboldi と同一種と取扱っている。" 普通に見出され特に神戸と日光に多い " と書いてある。

1894年 松村松年博士が動物学雑誌に (第6巻, 第65号) の上で " 北海道鞘翅類 (続き) " なる報文を発表しておられる (p. 84—97) がその中で p. 90 に本種が学名をもって記録されている。恐らくこの記録が日本人によって始めて日本から本種が記録されたものであろうと思われる。尤も翌1895年 同博士が同じ動物学雑誌上に (第7巻, 第86号, p. 51—65) 発表になられた " Catalogue of Coleoptera collected in Hokkaido " の中には本種が出てこない。北海道の記録はこの様には日本では一番古いのにもかゝらず北海道を分布にとりあげた文献は永い間現れなかった。このあたり大変不思議である。1939年 西島 浩氏は札幌から本種を記録, 北海道を新分布記録として報じておられるが (日本の甲虫 Vol. 3, № 1, p. 16) 氏は松村博士の記録を見ておられなかったのではないかと考える。

1898年には E. Reitter は Best.—Tab. Melol. II, Theil. XXXVIII, Heft. p. 44 に Glycetonina 属の種として東シベリア, 日本を産地に記載されている。今迄のところ原記載はどうか見ていないのでわからないがこの Reitter の論文迄種名は出て来るがこの種についての形態的記載と言うのは全く見られない。この Reitter はよって始めて記載がされたように思われる。

大上宇一氏は 1901年に " 播磨産金龜子科 " と言う報文を発表された (動物学雑誌 13巻, 156

号 p.321-323)。その中でクロハナムグリ *Glycyphana* sp.としてこの種を記録しておられるのである。当時同定に利用出来る文献と言ってほとんど無い状況下で記録されているのは敬服の致りである。この報文が日本人によって本種を本州から記録された一番始めてのものになると考える。その後大上氏は1907年にも「播磨産甲虫類」と題する報文で（昆虫世界, 11巻, 116号, p.159), 106クロハナムグリ *Glycyphana fulvistemma*と学名をつけて記録されLewisの1879年のカタログを参考文献としていることを書いておりLewisのカタログ番号1016も同時につけておられる。

日本人による日本で始めての本種の図説と言うことになるかと松村松年博士の「日本千虫図解, 第三」(p.188, pl.47, f.16, 1906)と言うことになるかと思う。

1921年に出版されたS. SchenklingのW. Junk Coleop. Cat. Pars.72の中では(p.273)本種の分布はDaurien, Monglei, Japan, KoreaとなりSieboldiはJapanを産地に変種扱にしている。

1923年は新島善直, 木下栄次郎両博士による名著「こがねむしに関する研究報告(第二), 我国産スルこがねむし及其分布」(北海道帝国大学農学部演習林研究報告, Vol.2, No2)が世に出た。この中でp.180-181, Taf.V, fig.10に本種を図説された。所謂本格的な分類論文である。産地はMongolia, Daurien, Japan, Koreaと従来の外国文献のものをそのまま掲げ新に京都, 東京を加えている。Sieboldiは変種に扱われている。

1924年岡本半次郎博士は「The Insect Fauna of Quelpart Island」なる論文を発表された(Bull. Agr. Exp. St. Gov. Chosen Vol.1, No2)。その中では済州島からは1頭のみ採集されこの島では稀な種のようなこともある。分布は東シベリア, 北支那, 朝鮮, 日本(本州)となっている。

1930年には横山桐郎博士の「日本の甲虫」の中で原色図説がされた(pl.12, f.3, p.96)。分布は本州, 朝鮮, 蒙古となっている。

1933年神谷一男・安立綱光両氏の「原色甲虫図譜」(pl.54, f.4), 平山修次郎氏の「原色千種昆虫図譜」(pl.65, f.5), 加藤正世博士の「分類原色日本昆虫図鑑 第八輯」(pl.11, f.11, 12)に夫々本種を原色図説された。それまで日本での分布は本州のみになっていたが加藤博士が始めて本州, 四国, 九州を分布に掲げ var. sieboldiを台湾に産するとして原色にて図説をされた。尤も1935年加藤博士の報文「主要金龜子科の分類(4)」の中では(昆虫界, 3巻, 18/19号, p.345)分布を本州, 朝鮮とのみにしている。

1935年高木 茂氏は本種の淡黄色の帯状紋の無くなっているものが名古屋瑞穂町の樹液に来ていたとして ab. nagoyanaとして記載された(昆虫世界, 40巻, 467号, P.256-257)。

1939年の三輪勇四郎, 中条道夫博士の「日本産鞘翅目録Pars.5, 金龜子科」でも日本は本州

のみを分布にされている (p.91), *ab.nagoyana*, var. *sieboldi* は入っている。

1940年の平山修次郎氏の原色甲虫図譜 (p1.5, f.5, p.8) は同一著者の1933年に出版されたものがそのまま収録されている (図示されたのは東京井之頭産のものである)。

この年代を代表する次の地方誌的文献の中にはそれぞれ本種が収録されている。

1937年渡辺福寿氏 "森林動物相調査報告, 第一輯, 金龜子科" (p.90-91, p1.23, f.47), 1938年福井県博物学会 "原色福井県昆虫図譜" (p1.8, f.28), 同じく1938年加藤正世博士 "武蔵野昆虫誌" (p.140)。竹内誠一氏 "岩手県甲虫誌, 第一巻" (p.117)。分布は加藤博士のものゝみ本州, 四国, 九州となっていて他は本州のみを分布地としている。

終戦後いち早く出版された(1950)北隆館の "日本昆虫図鑑, 改訂版" にはどうしたわけか本種が収録されていない。伊賀正汎氏が担当された "原色日本昆虫図鑑, 甲虫編" (保育社, p1.32, f.70, p.103, 1955) には勿論図説 (大阪府池田産) され日本での分布を本州, 四国, 九州とされている。

1960年野村 鎮氏は "日本産コガネムシ類目録" を発表された (Tōhō Gakuho No.10, p.39-79)。この中で *sieboldi*, *nagoyanus* 共にこの種に統一されて取扱われ日本での分布に北海道, 対馬を加えられた。このことは1963年出版された "原色昆虫大図鑑, 第2巻 (甲虫篇)" (p1.69, f.2, p.137) の中でもそのまま踏襲されている。

本種はシベリアあたりにはいる種なので (筆者は玉貫光一氏からシベリア産と言う1♂を領けて頂いている), 千島あたりにはいないだろうかと考えたりするが桑山 覚博士の "南千島昆虫誌" (1967) 及び G. O. Kryvolutskaja "Entomofauna of the Kuril Islands" (1973) の中には見ることが出来なかった。

朝鮮での産出状況は C. W. Kim "Distribution Atlas of Insects of Korea" (1978, p1.38, sc56, p.388) の中で図示されているが分布域はそれ程広いように見られないが, 5, 6月の出現が一番多いとある (戦前京城に住んでおられた野田と言う方と何回か標本の交換をしたことがある。その交換で逍遙山産と言う1♂1♀を送って頂いて現在でもその標本を所有している)。

その後日本での甲虫に就いての図鑑は啓蒙的なものは出版されているが本格的な図鑑と言うものはほとんど出版されていない。僅に1975年 "学研中高生図鑑, 昆虫II, 甲虫" がある位で1985年になって "原色日本甲虫図鑑, II" が久方振りの図鑑と言うことになる (1983年の岡島秀治, 海野和男両氏の "日本の甲虫", 1984年の黒沢良彦, 渡辺泰明両氏の "野外ハンドブック・12, 甲虫" にはそれぞれきれいな本種の原色図説がされている)。

これ程日本では分布も広いし, 普通種なのでその生活史も良くわかっているのだろうと思ったがどうも筆者の調べ方が不充分なのか日本での本種の幼期の図説も見られなかったし生態についての報告も見ることが出来なかった。案外とその生活史は不明の点が多くあるのではないだろうか。

海外では1952年にS. N. Medvedevは " Larve of the Lamellicornia (Col.) of U. S. S. R. " の中で幼虫を図説しておられる (p.173-174, figs.370-373)。さらに1964年同一著者による " Fauna U. S. S. R. Tom. X, №5 " の中では詳しい記載もされているし幼虫の図もついている (p.317-320, f.742-750)。

1984年にはZhang Zhi-liによる " Economic Insect Fauna of China. Fasc.28. Coleoptera: Larvae of Scarabaeoidea " には幼虫が図説されている (p.29, pl. VII, fig. 77-79)。それによると南京付近では1年1代で成虫は3月下旬頃出現し4月下旬から5月中旬成虫をもっとも多く見られると。

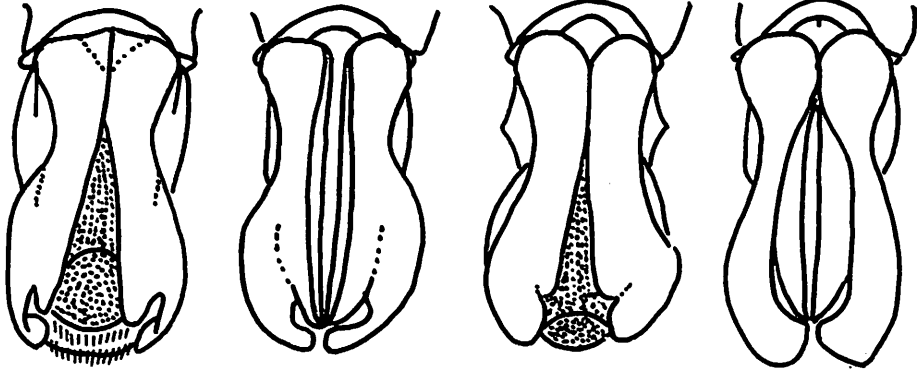
林博士も成虫は5月頃から出現し花にもぐる。幼虫はもろくなった朽ち木や腐葉土中でそれらの腐植物を食べて育つ。1~2年で成虫となると解説されている(1975)。

兵庫県産での採集時期でも5,6月が圧倒的に多く、7,8月と大変少なく9月の採集例も僅かならある。

普通種なるが故にその生活史を調べて見ようと言う人が出てこないのかもしれない。

クロハナムグリの淡黄色紋は色々の個体を見してみると割合変化があるようで既に野村氏がのべておられるように、上翅の中央に淡黄色の帯状紋があるほか数小紋が点在し、前胸背にも中央の細い縦紋とその両側の4小紋および側縁に沿った縦条は淡黄色であるが時に消失すると言う状況である(兵庫県産 30♂♂ 22♀♀ 所有標本を検しての結果)(小林裕和氏も八重山諸島産の個体では一般に多数の白斑を有する型のものが多いようであるとのべておられる、1974)。特に上翅の末端縁にそって淡黄色紋を可成り太く有した個体も神戸で採集出来ているし、加藤博士の図鑑に var. sieboldi として図説された様な斑紋を有するもの、" 原色日本甲虫図鑑(II) " で図説された様な斑紋のもの(特に前胸背に淡黄色が多く出ているもの)は神戸市内でも採集されている。台湾からの採集品も10♂1♀を所有しているが一般的なもの(どちらかと言えば黒っぽいものが多い)に混じて var. sieboldi と言われている様なものも3♂ある。

八重山諸島産と言うものの標本を所有していないので中胸突起中央に深い横溝があると言う特徴は良くわからないが台湾産の淡黄色紋の多い個体の中胸突起は横溝がはっきりしているが神戸市山の街で採集出来ている淡黄色紋の多い1♂の中胸突起には横溝が認められる(やゝ太い凹み)。♂の交尾器についても若干変化がある様である(図参照)。従って野村氏が扱われたように var. sieboldi も ab. nagoyanus(筆者が1984年にこの異常型になると思われるとした標本も良く見るとどうも該当しないようである)もこの種の斑紋の変化の範疇に入るものと考え方が良いのかもしれない(可成りよごれた個体も多く採集され真っ黒に近いようなものも採集出来る)。たゞソ連シベリア産のもの(1♂, 21-VI-1962)は日本産と比べて大変小さく、朝鮮産(逍遙山1♂1♀, 20-VI-1939)も細目で体長も日本産より短い。台湾産は日本のものと同じ様であるが中国大陸産



Medvedev, 1964

Kobe Karasuhara  
16-VI-1982

Kobe Yamanomachi  
28-V-1950

Formosa  
10-VI-1984

クロハナムグリの♂交尾器4態

あたりはどんなものであろうか（筆者丸2ヶ年の間中国大陸 — 主として揚子江沿いであるが — にいたが本種にお目にかゝった記憶は無い）。

最後に貧弱な筆者の所有文献で本種の日本における記録はどの様にあるのかまとめて見た。本種は同定に間違ふことはほとんど無いと考えられるが（参照文献では1つだけ学名が間違っていたように思う）、普通種のためか筆者の所有文献が貧弱の故か案外と少ない様に思われた。また全く記録の無い県があるのはひとえに筆者の文献の蒐集不足の故だと考えられる。たゞ何処の記録地でも多いと記録されたのは1, 2の地域を除いてなく、ほとんどの所で個体数は少ないようだ記録されている。

クロハナムグリの文献にあらわれた記録。

北海道（松村，1894）；札幌（西島，1939）；札幌，定山溪（逸見文次 1941，昆虫界 9（88）：391）；札幌，神居古潭（井内孝弥，1940 昆虫界 8（74）：277）。

青森県十和田村葛（渡辺，1937）。

岩手県高洞山，繋温泉，御明神村（竹内，1938）。

宮城県鬼首村（渡辺，1937）。

山形県飯豊連峰ヌクミ平（白畑孝太郎，黒沢良彦，1970 飯豊連峰：205）。

新潟県中頸城郡黒川（中根猛彦，馬場金太郎，1960 長岡科学博物館報：9）；胎内川上流（馬場金太郎，1972 飯豊山塊，胎内溪谷の生物：212）；新潟県（新潟県昆虫図鑑，下，1982：60）。

茨城県(日置正義, 1973 瑠璃星 1:3).

群馬県新屋村天引, 小幡町(小坂橋秀治, 1935 昆虫界 3(18/19):382).

埼玉県飯盛峠, 浦和市田島(斉藤良夫, 1978 埼玉県動物誌:227).

東京都武蔵野(加藤, 1938):井之頭(平山, 1933, 1940);渋谷, 世田谷区(久次米正雄, 1936 昆虫界 4(34):873).

神奈川県小田原, 箱根, 丹沢, 札掛(中村光, 1964 丹沢大山学術調査報告書:363. 平野幸彦, 1981 神奈川県昆虫調査報告:295).

長野県野尻湖畔(山田勇飛, 1943 昆虫界, 11(113):347);中・南信(降旗剛寛, 1979 長野県昆虫図鑑下:129).

富山県立山, 称名峡, 砺・井栗谷(北村征三郎, 1982 *Amica* 26:108).

愛知県各地, 北設楽山岳県立公園一帯, 裏谷(穂積俊文, 1958 佳香蝶 10(34):9;1968, 同 20(77):117);石巻山, 官路山, 鳳来寺山(松野更一, 松野光恭, 1975 三河の昆虫(12/13):49);南設楽郡鳳来町来寺山(大平仁夫, 1979 鳳来町自然と文化:75, 76).

岐阜県岐阜市(田内雄, 1940 昆虫界 8(73):168).

福井県福井市, 県下一円(井崎市佐衛門, 1935 昆虫界 3(13):19;原色福井県昆虫図譜, 1938, p1.8, f.28);鬼ヶ谷, 鳩が湯(井崎市佐衛門, 1959 福井県博物同好会々報 6:22);金草山, 日野山(佐々治寛之, 1976 福井県自然環境保全基礎調査報告書:174).

滋賀県(重原慶遠, 1937 昆虫界 5(44):715);高島郡(井崎市左衛門, 1939 昆虫界 7(68):597).

三重県伊勢平野(樋田清砂, 1937 昆虫界 5(35):56);藤原岳, 湯の山(後藤光男, 1961 藤原岳の昆虫:49;山下善平ほか, 1963 鈴鹿山脈自然科学調査報告書:251);経が峰(青山三郎, 井上晶次, 1968 ひらくら 12(4):27).

奈良県各地(今立源太郎, 1954 *Amateur Entomology* 5(1/2):10);伯母子岳(山本雅則, 1979 *Sakaiensis* 16(2):142).

和歌山県(後藤伸, 1950 紀州昆虫 2(3):49);和歌山市(岡本四郎, 1938 虫の世界 2(11/12):227).

京都府京都市(木村輝夫, 1936 昆虫世界 40(463):97).

大阪府箕面山(戸沢信義, 1932 箕面山昆虫目録:82;後藤光男, 1965 箕面山の動物相調査:176);高山道(西川芳太郎, 1977 箕面川ダム自然環境の保全と回復に関する調査報告:299);池田(伊賀, 1955);東能勢村青具山, 初谷, 保谷, 吉川峠, 高台寺道(仲田元亮, 1970 能勢の昆虫, 甲虫:35, 1978 同 I:119;1982 同甲虫之部上巻:308).

兵庫県各地(高橋寿郎, 1984 てんとうむし 9:8-9).



鳥取県倉吉市米田，打吹山，東伯郡関金町，  
犬狹崎（河本哲至，井上敏明，1978 すかし  
ば 10 : 7）。

岡山県北・中・南部（1978，岡山県の昆虫  
：129）；真庭郡八束村（桂孝次郎ほか，  
1973 蒜山の生物調査：159）。

島根県枕木山（野津 裕，1978 すかしば 9 :  
10）；隠岐島（門脇久志，1983 すかしば 20  
：7）。

広島県白木山（大沢省三，1965 広島虫報  
4 : 92）；灰ヶ峰（保田信紀，小阪敏和，1965  
広島虫報 4 : 92）；各地（中村慎吾，1966 比  
和科学博物館研究報告 10 : 9）；比和町（中  
村慎吾，1977 比和の自然：268）；世羅町屋  
ヶ草（小島敏和ほか，1979 広島虫報 18 : 279）。

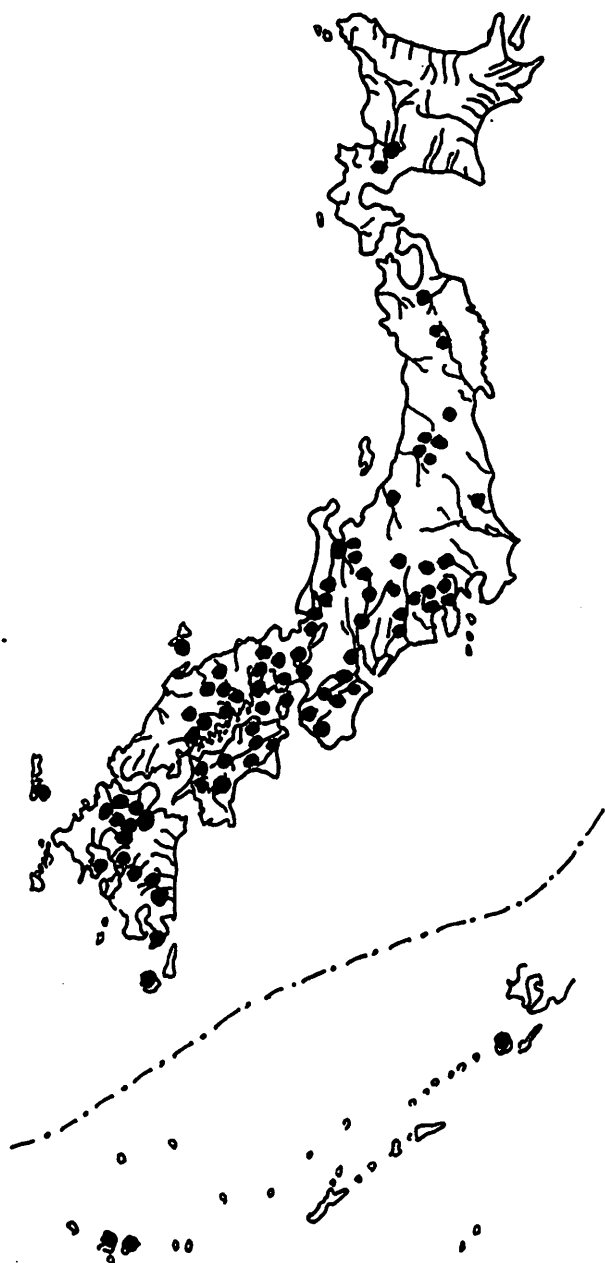
香川県小豆島（林 匡夫，1956 続・小豆島  
の自然：16）；高松市象頭山（佐頭正昭，1975  
月刊むし 48 : 31）。

徳島県徳島市名東町，名西郡神領村（三宅  
義一ほか，1958 昆虫科学 7 : 32）。

愛媛県松山市（森川国康，矢野俊郎，1941  
昆虫界 9(93) : 765）；面河溪（石原 保ほか，  
1953 四国昆虫学会々報 III : 70）；杉立，岩  
屋山，茗山，中山町（矢野俊郎，1961 松山昆  
虫同好会時報 16 : 17）。

高知県真如寺山，佐川町，越智山，筆山，  
梶が森（矢野俊郎，1961 松山昆虫同好会時  
報 16 : 17）；天狗高原（小島圭三，1963 県立  
自然公園天狗高原学術調査報告巻：170）。

福岡県鞍手郡宮田町（三宅義一，1957 北九  
州の昆虫 4(3) : 14）；英彦山（神谷寛之，  
1959 彦山昆虫目録 II : 26）；障子岳，深倉峽



クロハナムゲリの国々分布図

(松田勝毅, 1963 北九州の昆虫 10:12); 田川地方(高倉康男, 1967 北九州の昆虫 14(1):20); 篠栗, 宮田, 英彦山, 障子岳, 深倉峽, 大牟田, 筑穂, 飯塚, 城山, 香春岳, 福智山, 山田, 勝山, 田川市(高倉康男, 1978 生物福岡 №18:28); 足立山(中尾進治, 1979 北九州の昆虫 26(1):24); 白岩山, 本屋敷, 国見峠, 波畑(山脇好之, 1984 北九州の昆虫 30(3):172).

長崎県対馬有明山(中條道崇, 1961 Mikado 1(1):6; 野村 鎮, 1976 対馬の生物:354); 島原市千本木(今坂正一, 越智輝雄, 1979 北九州の昆虫 26(2):63).

熊本県熊本市本妙寺山, 阿蘇郡湯浦, 久木野村, 人吉市宝来町, 村山, 球磨郡水上村江代(大塚 勲, 1962 北九州の昆虫 9(2):27); 泉村, 二本杉, 熊本市黒髪町(直海俊一郎, 1970, 1971 熊本昆虫同好会報 35:6, 37:13); 熊本市熊本城内(大塚 勲, 1971 前出, 37:19).

宮崎県霧島山(磯崎恵明, 1968 タテハモドキ 3:34; 清水 薫, 1969 霧島山総合調査報告書:264); 児湯郡須木村綾北(中島義人, 1971 タテハモドキ 6:61).

鹿児島県佐多岬(三宅義一, 1956 北九州昆虫趣味の会々誌 7:12); 屋久島小杉谷(小林裕和, 1974 甲虫ニュース 21/22:8; 中根猛彦, 1984 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書:609).

先島諸島石垣島オモト岳, パナン岳, カピラ, マエ浜, カツラ山(小林裕和, 1974 前出 21/22:8); おもと岳(石田正明, 1984 神奈川虫報 71:32). 西表島(中條道夫, 1970 Mem. Fac. Edu. Kagawa Univ. 2(192):13; 小林裕和, 1974 前出 21/22:8, 白浜; 石田正明, 1984 前出 71:32).

以上長々と駄文を書いて来たが前にものべた様に普通種と言うことで案外注意もされていない点もあれば反面良くその生態・形態に就いてもわからない点が多くある。斑紋の変化も割合あるようだし、これで区別することは余り意味が無いとも考えられるし、交尾器の変化もあるように見られる。生態的なことがもっと良くわかって来ると、また違った意味での問題点のはっきりしてくるかも知れない。身近の虫でも色々と調べて見たい点が多くあることに気がついた。

(MAR. 1985)

# 武庫川のヒメジュウジナガカメムシ (続報 2)

新 家 勝

## I はじめに

*Trotidothorax belogolowi* Jakovlev ヒメジュウジナガカメムシ (以下本種という) の生態については、本誌第 10 巻 1 号および第 11 巻 2 号で報告してきたが、産卵場所の発見と各令幼虫の図解の作成が宿題になっていた。昨年はこれらを済ませるつもりでいたが、かねてから心配していた棲息地の破壊のため報告できなくなりました。そこで幼虫の図解については終令幼虫のみとし、代りに本種の観察を始めた 1981 年以降の分布状態について詳細に報告する。

## II-1 分布状態

武庫川とその周辺における本種の分布状態を、ガガイモ (以下食草という) の分布とあわせて表 1 に示す。また、表中に示される本種とその食草を確認した地点の概略を図 1 に示す。

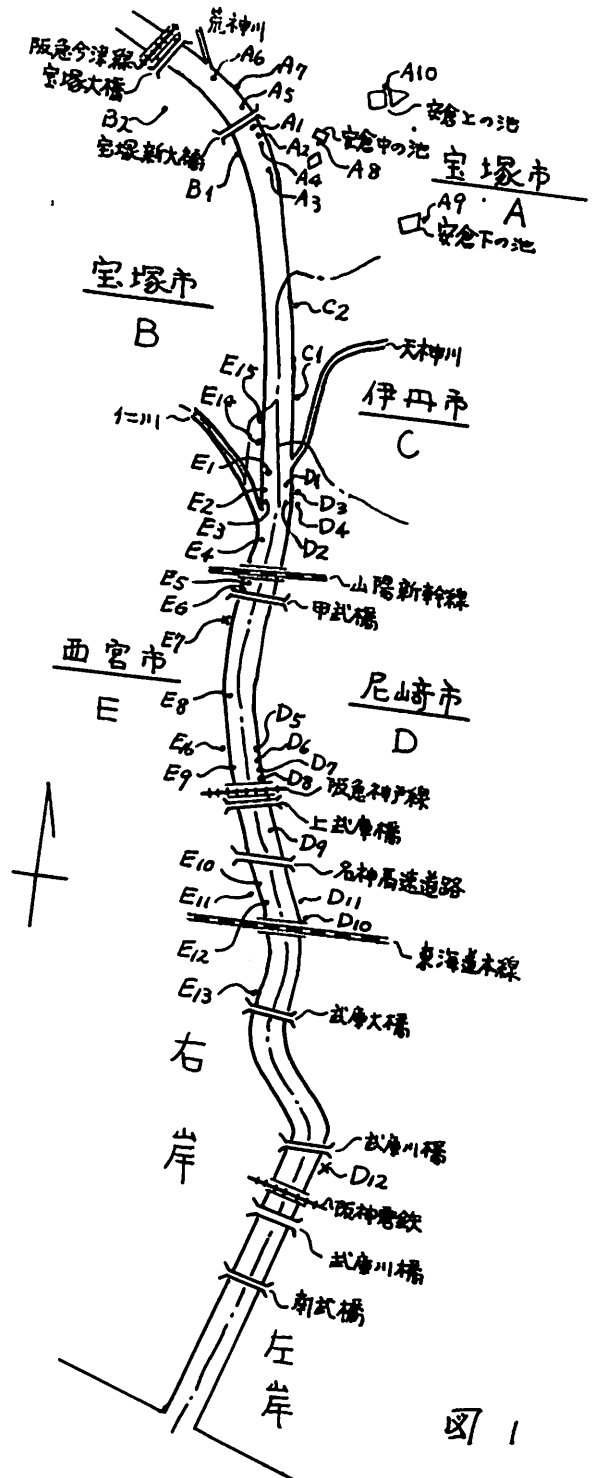


図 1

表 1

地点	年	1981	1982	1983	1984	備 考
A 1		○	◎	◎	○	1978年および1979年に本種と食草を確認。 河川工事のため食草はほぼ全滅。復活後、不法耕作のため全滅。 1983. 9. 28の大水で本種絶滅。 1984年末の河川工事のため食草全滅。 1983. 9. 28の大水のため本種全滅。 1983. 9. 28の大水のため食草は土砂に埋没。 道路脇であり、食草の生育不良。 武庫川堤防から約500 m離隔。 武庫川堤防から約1100 m離隔。 武庫川堤防から約1300 m離隔。
A 2		○	◎	◎	○	
A 3		○	○	×	×	
A 4		—	◎	◎	○	
A 5		—	◎	◎	○	
A 6		—	—	○	×	
A 7		—	—	○	○	
A 8		—	◎	○	◎	
A 9		—	—	—	◎	
A 10		—	—	—	○	
B 1		—	○	○	○	武庫川堤防から約300 m離隔。除草のため食草全滅。
B 2		—	◎	×	×	
C 1		◎	◎	◎	×	1981年に大発生観察した場所。1983. 9. 28の大水のため壊滅的な打撃を受け、堤防側面の食草に一部生き残っていたが、1984年初の河川工事のため本種、食草とも全滅。
C 2		—	—	◎	○	
D 1		○	○	×	×	1981. 8. 1～2の台風10号のため埋没。 同上
D 2		○	◎	×	×	
D 3		—	◎	○	○	
D 4		—	○	○	○	
D 5		◎	×	×	×	
D 6		◎	○	○	○	
D 7		◎	○	○	○	
D 8		—	—	○	○	
D 9		—	◎	○	×	

D 10	◎	◎	◎	○	再三の除草のため食草の生育不良。1984年は本種発生せず。
D 11			○		食草なし。セイタカアワダチソウでの吸蜜を確認。
D 12	×	×	×	×	1942年に初めて採集した場所。
E 1	◎	×	×	×	河川工事のため食草、本種とも全滅。
E 2	○	○			食草なし。カワラサイコでの吸蜜を確認。
E 3	◎	○	○	○	不法耕作のため食草激減。
E 4	○	×	×	×	河川工事のため食草全滅。
E 5	◎	◎	○	×	1982. 8. 1～2の台風10号で本種は全滅。 1982初の河川工事のため激減した食草は 1983. 9. 28の大水で土砂に埋没。
E 6	—	—	○	○	
E 7	×	×	×	×	1955年に本種と食草を確認した場所。
E 8	○	○	×	×	
E 9	—	○	×	×	1983年の河川工事のため食草全滅。
E 10	—	○	○	○	
E 11	○	○	○	○	
E 12	—	◎	◎	○	再三の除草のため食草の生育不良，1984年は本種発生せず。
E 13	○	◎	◎	○	1982年に大発生を確認した所。不法耕作のため食草は激減，生育不良。
E 14	—	—	○	◎	1984. 11. 13屋内で1頭確認。
E 15	—	—	—	○	1984年末の道路工事のため食草全滅。
E 16	—	—	○	○	

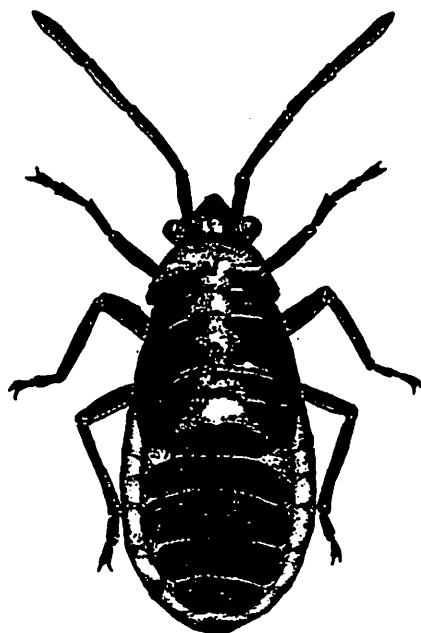
表中、◎は本種の棲息確認，○は食草の生育確認，×は食草の絶滅，—は本種，食草とも未確認を示す。

以上のように，食草の場所は数の上ではさほどの変化はない。しかしながら，大水，河川工事，不法耕作および公園化に伴う頻繁な除草のため食草の群生地は失われ，残った所も生育がよくない。以前は年間を通じて武庫川中のどこかで本種を見つけることができたのに，昨年1箇所を確認しただけである。しかも食草またはその周囲での確認ではなく，筆者の勤務先の建物（旧武

庫川堤防にあり、敷地には食草が多少生えている)内での確認である。他は武庫川堤防以外での確認であり、時期的にも限られたものである。従って、生態の観察をするどころではなかった。

## II-2 終令幼虫

終令幼虫は5令で、体長は6~7ミリ、発育の良し悪しによってこれらよりやや小さいものや、大きいものもある。体は橙赤色であるが、成虫に比べて赤味がやや少なく、光沢に富んでいる。腹部上面中央には第2腹節から第6腹節にまたがる大きな黒斑がある。また左右の前翅および後翅となる部分も黒色である。胸部上面左右の黒斑は中央より後方にあり、成虫のように前方まで伸びない。頭部および脚は黒色、触角もまた黒色である。



ヒメジュウジナガカメムシ終令幼虫

## III ま と め

本種をとりまく武庫川的環境は極度に悪化し、僅かばかりの個体を見つけるのがやっとという状態になってしまったので、今後の観察は非常に困難である。できれば捕獲して極力模擬した環境で飼育し、産卵場所の発見と各令幼虫の図解の作成につとめたい。

## 宍粟郡波賀町のムラサキツバメの記録

勝 屋 潤

ムラサキツバメ (*Narathura bazalus* HEWITSON) は兵庫県に於いては相生市、赤穂市、神戸市等で採集されているに過ぎない稀種である。

### 兵庫県に於けるムラサキツバメの記録

- |            |                   |                     |
|------------|-------------------|---------------------|
| 1. 明石市北王子町 | ?, ? - Ⅷ - 1959   | 小林 進 <sup>1)</sup>  |
| 2. 明石市大久保町 | 1 ♀, 4 - Ⅸ - 1959 | 竹内 崇郎 <sup>1)</sup> |
| 3. 多紀郡篠山町  | ?, ? - ? - 1957   | 基田竜太郎 <sup>2)</sup> |

4. 宝塚市	?, —	— <sup>1)</sup>
5. 神戸市ジェームズ山	1♂, 14-X-1979	加藤 昌宏 <sup>2)</sup>
6. 赤穂市周世	1♀, 5-Ⅷ-1981	唐土 洋一 <sup>4)</sup>
7. 相生市三濃山	1♀, 1-Ⅷ-1966	米村 和繁 <sup>5)</sup>
8. 川西市	1♀, 29-Ⅷ-1964	渡辺 康之 <sup>6)</sup>
9. 神戸市鉢伏山, 多井畑	?, —	— <sup>3)</sup>

これらの記録以外に波賀町赤西の記録があるが、記録された地点はほとんどが瀬戸内海側である。全国的な分布状況から見ると、本州（近畿以西）、四国、九州、南西諸島に分布するが、四国南半と九州、種子島、屋久島を除いては個体数が少ない南方系の種である。

近畿地方に於いても京都や奈良に産地があるが、御陵社寺の境内等、食樹の人工的移入に負う所が多い。

本種の食樹であるマテバシイ属 (*Pasania* Oerst) も、兵庫県に於ては非常に少なく、また調査もほとんどされておらず、本種及び食樹の分布は全くわかっていないと言っても過言ではない。

筆者は波賀町小野において本種の成虫及び幼虫を採集しているので、その時の状況及び飼育結果について報告しておきたい。

#### 1. 採集記録と採集地の状況

1983年9月18日波賀町小野地区の国道29号線の西側の林道において夕刻飛翔中のムラサキツバメ1♀を採集した。さらに民家の裏山にて背丈約40cmのシリブカガシ (*Pasania glabra* (Thunb.) Oerst) の幼木を発見し、これより6頭の終令幼虫と4頭の3令幼虫を採集した。本種の幼虫は薄緑色をしており、一見して黄色のムラサキシジミと区別できる。幼虫は食樹の若葉をつづって造巢しており、その中に見い出される為、発見は容易である。

その日は日没となった為、これで引き上げた。

同年10月8日と10月23日にも同地を訪れたが、本種は発見できず、かなり捜したがシリブカガシ並びにマテバシイ (*Pasania edulis* Makino) も発見できなかった。

9月18日の採集は偶産だったのであろうか？

11月3日には広畑政己氏と共に同地を訪れたが、やはり本種及び食樹は再発見できなかった。

同地の林道沿には常緑ガシは割と見られたが、シラカシ及びウラジロガシに似た種（未同定）ばかりでシリブカガシは見られなかったが、斜面がきつく林道沿しか調査していないので、斜面の上部及び中部にシリブカガシが自生している可能性はあると思われる。

9月18日に発見したシリブカガシは食樹の茎径が約1cmの幼木で切られた大木のひこばえなのか、何らかの（自然あるいは人工的）要因により運ばれた果実から芽生えたものなのか、食草として持ち帰る為、切断してしまったので今となっては不明である。ただ食樹を発見したこの民家

の裏山はかなり伐採と植林がなされており、また林道の方も奥の方はかなり植林されているので、例え自生していたとしても切りとられた可能性も高い。

## 2. 飼育結果

9月18日に持ち帰った幼虫は終令6頭は2日後に蛹化し、10月初旬には3♂3♀が羽化した。

3令幼虫4頭は全て寄生バエにより寄生されており蛹化に到らなかった。食樹はシリブカガシを与えたが、途中アラカシも与えてみた所、1頭が少しかじった程度で食さなかった。

ただ、これらの幼虫はやがて寄生バエの蛹が出てきた為、死亡したのでアラカシをどの程度食するのか、或いは他の *Quercus* についての知見は得られなかったが、九州産のものはアラカシを食するものもあると言う。

得られた成虫及び羽化した個体は岡山産や四国産を比較して大きさ及び色彩について、差異は認められなかった。

## 3. 分布の予想

波賀町小野における1月等温線は3℃であり、1月の日最低気温の平均は-3℃程度である。(図1参照) 他の産地と比較すると、赤穂市及び相生市は4℃であり1℃高いが篠山においては同じく3℃である。

冬期の積雪状況を調べないと詳細は不明であるが波賀町小野においては、本種が土着するには冬期の気温はかなり厳しいように思われる。しかし近隣の岡山県の産地も2ヶ所ほど訪れたが冬期はかなり寒さの厳しい所である。

従って、確実な事は調査不足で言えないが、越冬している可能性もあると考えられる。

筆者は引き続き、波賀町、一宮町、山崎町方面を調査する予定であるが、

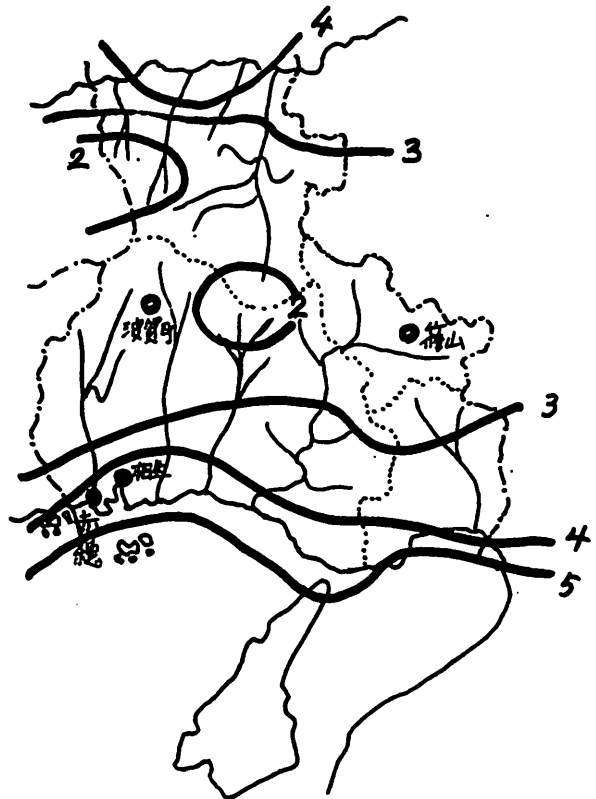


図1 1月等温線図



国道 29 号線の東側にも環境のよい所が多くあり、再発見の期待が持たれる。

是非、同好諸氏の御協力を得て兵庫県における本種の分布及び生態を明らかにしたいものと思う。

本稿を草するにあたり、広畑政己氏には多くの御教示を頂いた。特に文献類の多くは同氏の御援助によるものである。ここに記すことにより感謝の意を表わしたい。

#### 参 考 文 献

- 1) 山本広一・吉阪道雄(1965) 兵庫県産蝶類目録(4), 兵庫生物 5(1): 53
- 2) 丹波昆虫研究会(1957) 丹波の蝶, 丹波昆虫(3): 10
- 3) 加藤昌宏・武術晴雄(1981) 神戸の蝶, 神戸市立教育研究所
- 4) 唐土洋一(1981) 西播におけるムラサキツバメの新産地, てんとうむし(7): 19
- 5) 米村和繁(1966) 相生市におけるムラサキツバメの採集例, 昆虫と自然 1(8): 12
- 6) 渡辺康之(1978) ムラサキツバメの能勢妙見山での記録, Crude(17): 14

### 宝塚市清荒神のチョウ (追録 4)

加 藤 信 一 郎

今年(1984年)は記録破りの厳冬の影響もあってか、こゝ数年多く見かけるようになったナガサキアゲハは、春先から夏にかけても目撃・採集ともに少なく、又クロアゲハ、スジグロシロチョウなど例年普通に見られるチョウについても、全般に発生の遅れ、発生頭数の少なさが目についた。唯一の収獲は、8月末初めてナガサキアゲハの1♀を自宅の庭先で目撃できたくらいであった。

ところが9月に入って中旬から10月上旬にかけてヒョウモンが多発した。場所は清荒神参道脇東側の疎林々緑で、最も多かったのはミドリヒョウモンであり、10月には庭先にまでしばしば飛来するようになった。採品の破損状態・時期から見て、夏眠を終えて近くの低山地から移動してきたものと思われ、これまでもこの季節には単発的に採集・目撃してはいるが、これ程多数・種を一度に見ることはなかった。又同じ時期にこの疎林の林縁でアサギマダラが群発したのも特筆される。その他新たな知見も加えて下記の通り報告する。

1. ミドリヒョウモン *Argynnis paphia geisha* Hemming  
♂多数, 3 ♀. 採集者, 筆者・谷友晴(高司中3年)・中井和彦(同)
2. メスグロヒョウモン *Damora sagana ilona* Fruhstorfer  
3 ♂, 2 ♀. 採集者, 筆者・谷・中井. ♂は初記録である。
3. オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* Motschulsky  
1 ♀, 6-10-1984. 採集者, 中井. 初記録である。
4. アサギマダラ *Parantica Sita nipponica* Moore  
3 ♂, 6 ♀. 採集者, 谷・中井.

以上4種の採集時期・場所は先に述べた通りである。アサギマダラについては、かつて同所に住んでおられた猪股涼一氏から、以前には多かったことを聞いていたが、筆者はここ十数年目撃したことはなかった。

5. コチャパネセセリ *Thoressa varia* Murray  
1 ♀ ab, 26-7-1984. 採集者, 谷.

夏型でやや小型、地色は表裏とも黒みがかっており、裏面の前後翅外縁に沿って黄褐色小紋が各室に明瞭に出現する異常型を呈する。初記録である。

6. サトキマダラヒカゲ *Neope geschkevischii* Ménétriès

自宅周辺では絶滅したと思っていたが(加藤, 1981), 荒神川西岸を少し入った雑木林(クロコノマチョウの採集地点-加藤, 1984)で毎年発生していることが分った。

以上の中、オオウラギンスジヒョウモンとコチャパネセセリは当地では初記録なので、消荒神で確認されたチョウは46属, 58種となる。なお採品は採集者がそれぞれ所蔵している。

## 新神戸駅のミスジピロードスズメ

田 中 稔

新神戸駅附近は水銀燈が多くあり、すぐ後が布引の山がせまっているため大型蛾類が多い。筆者は新神戸駅の高架下でミスジピロードスズメ *Rhagastis trilineata* Matsumura を採集しているので報告する。

1 ♂, 神戸市新神戸駅, 1973年6月16日, 田中稔採集

本個体は前翅長が50 mm, 前翅裏面のR<sub>5</sub>を境にして斑紋外縁は浅い波状で、ピロードスズメは深

く切れ込む点で区別できる。

#### 参 考 文 献

井上 寛 (1982) 日本産蛾類大図鑑, 講談社.

## 神戸市山田町の蛾 (続報 III)

松 本 健 嗣

1. フユシヤクモドキ (ハマキガ科) *Tortricodes ignavana* Christoph  
1984年 3月 20日 1♂ 北区山田町字藍那  
3月下旬藍那の集落内外のシラカン, アラカン, シイ, コナラ等の多い林中の灯火下でよく見かける。
2. モモプトスカシバ (スカシバガ科) *Mellitita japona* Hampson  
1975年 7月 28日 2♂♂ 1♀ 山田町原野  
成虫は昼間アマチャズルが生じた場所を飛ぶが, 小生は同年 12月その蔓よりゴール (虫えい) を採取, 翌 1976年 6月 15日 1♂ が羽化した。オオモモプトスカシバの食餌植物はカラスウリであることが知られているが, 北米大陸産の *Mellitita satyriniformis* 種は好んで南瓜等の蔓に食入すると言う。Mellitita 属の食餌植物はいずれもウリ科植物らしい。  
なお, 小生山田町では Aegeriidae スカシバガ科の蛾は都合 13 種を採集している。
3. チャオビフユエダシヤク (シヤクガ科) *Phigaliohybernia fulvifula* Inoue  
1985年 3月 14日 5♂♂ 山田町字藍那  
本種は従来非常に稀種として扱っていたが山田町のみならず六甲山麓のアラカン, コナラを主体として雑木林には大低おり, 且つ個体数も多い。  
その他所謂フユシヤクと称されるシヤクガ科としては,  
1) シロオビフユシヤク (12. 1月), 2) クロテンフユシヤク (2. 3月), 3) ウスパフユシヤク (1月), 4) ホソウスパフユシヤク (3月), 5) ナミスジフユナミシヤク (1月), 6) クロオビフユナミシヤク (12月), 7) シロフフユエダシヤク (2. 3月), 8) クロスジフユエダシヤク

(12月), 9)チャパネフユエダシヤク(11.12月), 10)シモフリトゲエダシヤク(2.3月), シロトゲエダシヤク(3月)及び上述のチャオビフユエダシヤク(3月)の都合12種が六甲山麓の雑木林で普通に見られる。

4. ウズミケンモン(ヤガ科) *Apatele carbonaria* Graeser

1973年8月28日 1♀ 山田町北甲栄台

小生藍那地区環境調査(1979)には採集日を7月2日と記したがこれは誤りであったので訂正する。本種は日本では主に関東、中部地方の低地のクヌギ、コナラ林で得られているが、それらの採集時期はいずれも4月である。

5. ホソバミドリヨトウ(ヤガ科) *Euplexia literata* Moore

1973年10月7日 1♂ 山田町北甲栄台

西日本に産し本州では他に京都比叡山, 三重県滝原町, 和歌山県大塔山, 奈良県十津川村, 滋賀県比良山, 鳥取県大山での採集例であるが, それらの地はいずれも深山の自然林(原生林)である。だが小生が採集した地点は一見何んでもない二次林である。

6. ウスイロキシタバ(ヤガ科) *Catocala intacta* Leech

1964年7月1日 1♂1♀ 山田町字原野

1984年6月28日 1♂ 字藍那

1984年7月12日 1♀ 同上

山間のアラカシのかなりの大木で成育する。

参 考 文 献

保育社; 原色日本蛾類図鑑上・下

北隆館; 原色昆虫大図鑑I

日本蛾類学会; 蛾類通信 No.61 (1970), No.96 (1978), No.101 (1979), No.116 (1982)。

三重昆虫同好会; ひらくら No.5 (1961)

兵庫県自然保護協会鈴蘭支部; 藍那地区自然環境調査(1979)

G.P. PUTNAM'S SONS (New York); FIELD BOOK OF INSECTS (1918)

ウズミケンモンをご同定頂いた 杉 繁郎 先生に深謝する。

## 兵庫県産コメツキムシの記録

有本久之

兵庫県産のコメツキムシは岸井〔きべりはむし 12(1),(2)〕によって126種が記録されている。筆者はこのリストをもとに、所有する標本を調べたところ、未記録のものが若干あることに気がついたので、採集記録の少ないものと合せて報告する。これで本県産コメツキムシは131種ということになる。

尚、貴重な標本を提供して頂いた諸氏に、心からお礼申し上げたい。

### 1. *Agrypnus (Colaulon) miyamotoi tsukamotoi* (Kishii, 1956)

ハマベオオヒメサビキユリ

従来は姫路市網干(浜田)美方郡浜坂町及び淡路島から記録があるのみであったが、芦屋市でも採集された。

芦屋の生息地は、海岸の開発が進んでおり、いずれこの地域のもものは、絶滅するのも近いことと思われ、大変残念である。

芦屋市芦屋浜, 50 exs. 3 XI 1983. 筆者採集。

### 2. *Colioascercus saxatilis* (Lewis, 1894) ヒラタクロコメツキ

飾磨郡前庄, 7 exs. 17 III 1974. 稲田和久採集。

### 3. *Kibunea approximans* (Lewis, 1894) キアシヒメカネコメツキ

砥ノ峰高原, 1 ex. 10 VI 1987. 藤原均採集。

この記録は本県初記録である。

### 4. *Gambrinus kraatzi nihonicus* Kishii, 1966 フタキボンカネコメツキ

本種は翅鞘の後方部に一對の楕円形状の黄斑を有する美麗種で比較的良好に知られているが個体数は少ない。溜木のたたき網によって採集される事が多い様であるが、赤西では、カエデの花又はその周辺から得られている。本種は本県未記録種である。

宍粟郡赤西, 1 ex. 5 V 1982. 大平廣士採集。

宍粟郡赤西, 1 ex. 5 V 1982. 小田中健採集。

宍粟郡赤西, 1 ex. 8 V 1983. 加藤敦史採集。

5. *Acteniceromopbus kurofunei* (Miwa, 1934) ミヤマフトヒラタコメツキ  
本県からは2例目の記録と思われる。  
宍粟郡音水, 1 ex. 3 VII 1979. 大平廣士採集。
6. *Prokraerus (Prokraerus) cariniceps* (Lewis, 1894) クロホソキコメツキ  
本県初記録である。本種は大変珍しい種で近畿地方からは京都府と奈良県で得られているにすぎない。  
宍粟郡音水, 1 ex. 3 VII 1979. 大平廣士採集。
7. *Prokraerus (Agripenthes) helvolus* (Candeze, 1873) ヒメホソキコメツキ  
普通種であるが本県からの記録は少ないので新産地を記録しておく。  
氷ノ山, 1 ex. 21 VII 1984. 筆者採集。
8. *Ampedus (Lewisiellus) gracillipes* (Lewis, 1894) ミヤマタテスジコメツキ  
本県からは大河内に次ぐ産地である。朽木割りで得られた。  
氷ノ山, 2 exs. 30 X 1983. 田中正浩採集。
9. *Anchastus mus* Lewis, 1894 クロアシプトコメツキ  
山頂付近の灌木のたたき網によって得た。少ない種の様である。本県初記録。  
永ノ山, 2 exs. 21 VII 1984. 筆者採集。
10. *Ectinus sepes* (Lewis, 1879) キアシムナボソコメツキ  
本県からの記録は少ない様である。  
氷ノ山, 1 ex. 21 VII 1984. 筆者採集。
11. *Hypolithus (Hypnoidus) brunneofuscus* (Nakane, 1954) チャグロヒサゴコメツキ  
本県初記録である。  
氷ノ山坂ノ谷, 1 ex. 3 VII 1979. 大平廣士採集。

## 兵庫県下でのイトヒゲニセマキムシの採集例

(兵庫県甲虫相資料・154)

高橋寿郎

イトヒゲニセマキムシ *Dasycerus japonicus* Nakane, 1963 は兵庫県篠山で中根猛彦博士が採集(28-Ⅳ-1952)された標本に基いて新種記載されたものである(Frag. Coleop. pars. 5:22, 1963)。同時に同博士は原色でも図説された(原色昆虫大図鑑, 第2巻, pl.36, f.2, p.71, 1963)。最近多比良嘉晃氏は静岡県下での採集記録を発表された(静岡の甲虫, 第2巻, 第1号, p.17-18, 1983)。その中で本種の日本での採集例の記録をまとめておられる。

兵庫県下では原記載の産地以外全く記録が無いが筆者は相生市三濃山で採集した標本6 exs. (1 ex., 28-Ⅳ-1974, 1 ex., 12-Ⅴ-1974, 1 ex., 18-Ⅴ-1974, 3 exs., 29-Ⅶ-1974)を所有しているので此処に県下での二番目の記録として紹介しておきたい。

採集状況は残念ながら余りはっきりおぼえていない。多比良氏も記しておられるように本種は可成り分布の広い種のように微少なため見落されていると思われる。県下にも他に産地は恐らく多くあることと考えられる。多比良氏は枯朽木樹皮下等にいる種のようにだと記しておられる。

(1985年2月)

## 兵庫県産二種のハムシの記録

(兵庫県甲虫相資料・155)

高橋寿郎

### ○ オオサルハムシ *Chrysochus chinensis* Baly

余り小さくないハムシなのであるがどうしたわけか兵庫県下からの記録は古く Heyden の Hio-go (1879) と言うのがあり山本義丸氏の氷上郡黒井町(1953, 1958)が知られているだけでその後記録が見られない種である。1984年加東郡東条町森地域で蜂谷幸雄氏と一緒に環境調査に出かけた際蜂谷氏が 1 ex. (22-Ⅷ-1984) 採集されたので此処に記録しておきたい。

本種の食草はイヨカズラ・サツマイモが知られているし、分布も割合広いようなので調査をすれば県下の産地はもっと見つかると思う(標本蜂谷氏保管)。

○ テントウノミハムシ *Argopistes biplagiatus* Motschulsky

本種は兵庫県下での記録は今迄無かったように思われる。筆者は1983年9月14日市内烏原で叩網で1 ex.採集した。また蜂谷氏採集のハムシ標本を見せて頂いたところ同氏が東灘区岡本で採集された1 ex.があった(Ⅶ-1968)。

黒色で上翅に赤紋を有する特異な形態で一見してわかる種である。

最近熊沢隆義氏が宇都宮で大発生した本種に就いての報文を発表しておられる(インセクト 34巻 2号, p.88, 1983)。それによると本種はヒイラギを食害して成育するようで卵越冬で6月頃成虫は羽化して出現するようで10月末にはヒイラギの葉裏に卵を見られるとのことであった。

(1985年2月)

イワキオチバゾウムシ(?)神戸市内に産す

(兵庫県甲虫相資料・156)

高橋 寿郎

神戸市内の烏原地域で半分程落葉の中にうづもれていたコナラの樹を引っくり返して見たところ小さなゾウムシが1頭ついていた。早速採集すると同時に更にいないかと詳しく調べて見たがみられなかった。尤も落葉とかそのあたりの土も一緒に持ち帰りベルレーゼ装置でも調べればもっといたのかもしれない。とりあえず1頭しか採集出来なかったのであるが一応検鏡して調べて見たがどうも中根博士の図説されている *Otibazo morimoto* Nakane (日本昆虫大図鑑, pl.184, f.24, p.268, 1963) に該当するように思われる(原記載 *Frag. Coleop. Pars.9*, p.36, 1963)。

この属には森本博士が *O. nagasakiensis* Morimoto (Kontyu, 29巻, 1号, p.25-27, 1961) を記載詳しい図もついているがこちらの種ではないと思われる。標本はどうも♀標本なので今一つはっきりしない。森本博士が指適 (*Nature Study*, 16巻, 1号, p.7, 1970) されたように中根博士の記載が割合簡単できめ手となる点がよくわからないが一応本種として同定しておきたい、もっと材料を集めて見なくてはならないが兵庫県下からは初めての記録になる種だと思われる。

産地: 神戸市烏原 (1♀, 5-Ⅳ-1983) (其の後森本博士に見て頂いたが *O. morimotoi* に近い種であるとの御返事を頂いている。標本は同博士の手許に保管されている)。



ところで落葉下にすむゾウムシについて森本博士の大変有益な報文があり ( *ibid.*, p.4-7, 1970 )。兵庫県下のこの仲間の調査もやれば可成り色々の知見が得られるだろうと思われるが残念ながらその機会に恵れていない。

たゞ 1979年に神戸市内の須磨白川地域でピットホールトラップによる1年間の調査をした際の甲虫類の採集品が全部筆者の手許に保管されている。それを見ると3種が採集されている ( 1種は県下初記録として報告した。兵庫生物, 8巻, 3号, p.154, 1982 )。

○ *Trachphloeosoma advena* Zimmermen      イコマケシツチゾウムシ

ハワイ・タンタルス山から記載された種であるが中根博士により大阪の生駒から沢田高平氏が採集された標本に基づいて記載され同時に同博士によって原色で図説もされた種 *Tradyphloeosoma sawadai* Nakane, 1963 が之に当たると。

大変小さい種で落葉下に装置したトラップの中に入っていた。恐らく割合多くいるのではないだろうか。兵庫県下での記録は今迄無かったが、之は調査をされていないからで平凡な雑木林の中で得られているのだから市内でも広くいるだろうと考えられる。最近森本博士によって原色で図説されている (1984)。

産地：神戸市須磨白川 ( 1 ex., 14-Ⅸ-1978, 1 ex., 11-Ⅺ-1978, 1 ex., 22-Ⅱ-1979, 1 ex., 28-Ⅱ-1979, 2 exs., 29-Ⅶ-1979 )。

採集データで御覧のごとく比較的早い時期と遅い時期に活動しているようである ( 本種の同定は森本博士にお願いし, 上記の内 2 exs. は同博士の手許に保管されている )。

○ *Trachyrhinus* sp.

産地：神戸市須磨。白川 ( 1 ex., 22-Ⅱ-1979, K. Morimoto det in his coll. )。

この属の日本産は割合いるようだが県下からは *T. troglodytes* Morimoto シュウホウチビツチゾウムシが氷ノ山から記録されているだけである ( 畑中, 1973, 1975, 高橋, 1981 )。

○ *Asphalmus* sp.

産地：神戸市須磨。白川 ( 25 exs., 25-Ⅳ-1979, 内 4 exs. 森本博士の手許に保管 )。

ホソヒメカタゾウムシ *A. japonicus* によく似た種であるが種名未確定。尚筆者が川辺郡猪名川町槻並で採集した 1 ex. (4-V-1979) も *Asphaltus* 属のゾウムシの様であるがこの種も種名未確定(この標本は森本博士の手許に保管)。

以上のように落葉下にいる甲虫類はアリゾカムシにしてもハネカクシにしてもまだまだわからないものが多い。落葉下のゾウムシにしても何種類いるのか見当もつかないのが実状らしい。調べるのには面白いグループのようである。

末筆になり大変申し訳無いのですが常々何かと御教示頂いております 森本 桂博士に厚く御礼申しあげます。  
(1985年2月)

## 県 関 係 文 献 紹 介 (1984.1985)

- 冨永 修・桂 孝次郎. 日本産ネクイハムシ亜科に関する研究. 2. オオミズクサハムシの地理的変異と近似の1新種について。

大阪市立自然史博物館研究報告 №37:2-40, p1.8, March, 1984.

本論文の中で神崎郡砥ノ峯及び岡山県苫田郡上斉原村産でチュウゴクオオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis chugokuensis Tominaga et Katsura* なる新亜種の記載がされた。この貴重な論文を御恵送頂いた 桂 孝次郎 氏に厚く御礼申しあげる。

- 奥谷 禎一. 兵庫の昆虫 季刊 兵庫のペン №23:16-19, 1984.

表題のごとく兵庫県の昆虫相の概説なのであるが一般に余り知られていない文献と思われる。貴重な本巻を御恵送下さった著者奥谷博士に厚く御礼申しあげる。

- 山口福男. 清水東条湖県立自然公園の昆虫。

朝来郡山県立自然公園の昆虫。

出石糸井県立自然公園の昆虫。

上記3地域の県立公園及び周辺地域の自然環境調査報告(3部, 1985年3月刊)の中において昆虫を担当された本会々員山口福男氏がそれぞれまとめられたものである(掲載ページは夫々上から p.20-22, 33-37, 23-27)。発行は兵庫県新観光課となっている。この入手し難い文献を御恵送頂いた山口福男氏に厚く御礼申しあげる。尚本年は笠形山・千峰, 峰山・雪彦山,

音水深林の3県立自然公園の調査が行われるとのこと。

(T)

県内学会誌・同好会誌・連絡誌 (1984. 1985)

兵庫生物(兵庫県生物学会)

Vol.8, No.5 (1984. 2). Vol.9, No.1 (1985. 1).

Parnassius (淡路昆虫研究会々誌)

No.30 (1984. 3). No.31 (1984. 12).

Insect (淡路昆虫研究会連絡誌)

No.31 (1984. 5). No.32 (1985. 1).

てんとうむし(姫路昆虫同好会々誌)

No.9 (1984. 9).

姫昆サロンニュース(姫路昆虫同好会連絡誌)

No.64 (1984. 1)~ No.71 (1984. 3).

兵庫陸水生物(兵庫陸水生物同好会通信)

No.13 (1984. 5). No.14 (1984. 7). No.15 (1984. 9). No.16 (1984. 12).

No.17 (1985. 2).

昆虫ずかん(但馬むしの会連絡誌)

No.3 (1984. 1). No.4 (1984. 2). No.5 (1984. 4). No.6 (1984. 6). No.7 (1984. 8).

No.8 (1984. 10). No.9 (1985. 1).

ひろおび(播磨蝶友会々誌)

No.7 (1984. 5).

Crude(大阪昆虫同好会々誌)(兵庫県関係の報文発表が多いので収録しました)。

No.25 (1984. 12).

のせ(大阪昆虫同好会連絡誌)

Vol.13, No.1~ Vol.13, No.4 (1984. 2~9). Vol.14, No.1 (1985. 1).

(T)

## 編 集 後 記

- 本年の冬は余り寒くなくやれやれでした。本誌がお手許にとゞく頃は採集の好期と思います。皆様方の活躍をお祈り致します。
- 最近は虫が好きだとか、虫で楽しむと言う風潮は非常に減少して来たように思います。自然破壊の影響ばかりでは無く何かに追いかけているような、経済的、精神的な余裕の無さのせいのようにも思われます。
- 本会々員 内海功一氏は 1985年 3月 12日、兵庫県教委から「流域住民とともに千種川の水質調査など清流を守る活動を続けた」として県教育功労者として県民会館で表彰を受けられました。日頃の研讃の賜物と心よりお祝を申しあげます。
- 原稿が無いので発行に一苦勞です 次号発行を 11月に予定していますが宜敷くお願い致します。

(T)

---

---

きべりはむし 第13巻第1号

昭和60年5月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方  
振替 神戸 7-26646

印刷：憺文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11

---

---